



次 目

各地通信報導……………	兒童劇 ……ル……………	國友總監の施政方針を讀みて……………	信仰と疾病……………	教 觀 不 離……………	聖訓摘要……………
編	古	小	石	本	本
轉	田	林	田	多	多
局	昂	日	誠	日	日
	生	種	生	生	

號月六年十三第

敬觀不為
6月号 P24-30 7頁
7" P27-32 5頁
8" P27-34 8頁

20
30°

教

第五號

その目次

一、御製數首	佐藤鐵太郎
一、我建國の精神と國民の使命	志賀重昂
一、世界當代地理	モリス・ブリス氏 岩野直英譯
一、社會主義評論	立正大師
一、聖語數節	床次竹二郎
一、信念と第二維新	高島平三郎
一、教養逸話	桃源遺事
一、義公逸事	永井米藏
一、勞働問題の解釋	南洲先生
一、遺訓數節	今泉定介
一、國體觀念	葵 婆 塞 戒 經
一、世戒第一義戒	本多日生
一、東洋思想の大共通點	以上

蓄音機 ドコロ

大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
 - 一、佛教信仰の歸結
 - 一、佛教の卓越せる所以
 - 一、聖語
- 二枚四組二圓四十錢(外二送料三十錢)
取次所 統一編輯局

本多日生現下著小冊子

- (現在品のみです賣切れ絶版になつたものは注文さるゝと餘計な手数で困ります)
- 自我 偈 講 義 一部金廿錢送料金貳錢
 - 修法勸行の心得 一部金十五錢送料貳錢
 - 一切の勝利は人格にあり 一部金五錢稅二錢十部
 - 宗教の五綱 一部金拾五錢送料金貳錢
 - 教育勸語と思想問題 一部金壹圓送料共
 - 十部金壹圓送料共
- 名古屋市東區田代町城山 編輯局
振替名古屋一〇八一九

聖訓摘要

(第貳)

本多日生

念佛者追放宣狀事

これは三十八歳の時に書かれたものでありますが、念佛者即ち法然並にその一類が處罰せられた宣旨なごを蒐めたので、日蓮聖人の書かれた文章ではなくして、歴史の事實を記録せられたものであります。中にどういふ事が書いてあるかといふと、法然上人の主張が「一向専念」といふことを言つて、阿彌陀如来より外の佛も神も總てを排斥したものでありますから、日本の神様も敬はないといふやうな事になつて居る。そこで神明を蔑如する——日本の神様を蔑ろにするといふ點に依つて處罰されて居るのであります。法然上人の書いた「撰擇集」といふ淨土宗の書物に、版木を取上げて比叡山の大講堂の前に於て燒拂つて、絶版にされ、法然上人の遺骨は掘返して賀茂川に曝したのであります、それからその他親鸞上人などもやはり同じ意味に於て越後に流されたのである。日蓮聖人の流されたのは、主として勤王の大義を唱へて鎌倉幕府の専横に反抗した爲めに流されたのであるし、淨土門一流は敬神の觀念を缺くといふ點に於て處罰せられて居るので、處罰の原因が非常に違ふのであります。それ等の處罰の事について、この『追放宣旨事』には澤山の證據書類が蒐輯されて居るのであります、これは讀みさへすれば判ること

でありますから、別に要文として抽出することは致しませぬ。次は

十法界事

といふので、これは大切な御遺文になつて居ります、二乗作佛の事に關して種々と教義が述べてあるので、大切な教義が現はれて居ります、その要點が書量品は現はれなければ眞に成佛とは言へないといふ事が論證されて居るのでありますが、他の御遺文に現はれて居る教義と殊更ら變つた點もないのであります。専門に學ぶ場合には是非全部を講じなければならぬ御遺文でありますけれども、今は省略して置く次第であります。次は

爾前二乗菩薩不作佛事

と題するので、法華經より前のお經に於ては二乗も菩薩も佛になれないといふことを書かれたのであります。それは二乗が佛になれなければ、随つて菩薩も佛になれない。十界具足の身であるから、二乗が佛になれぬといふ事を察れば、誰も成れぬことになる、人間も無論成れぬことになつてしまふ。二乗といつて別なものではない、人間の内に自分の事をのみ考へる精神が二乗根性といつてあるのであるから、善くない考へはあるけれどもその精神を有たぬ者は無いのである。今日の如きは一層その精神が盛んになつて、西洋の文明は殆ど二乗根性の文明といつても宜い位な事でありますから、それは宜しくない事ではあるけれども、その精神を有つ者が佛になれぬとすれば、今後の人類はすべて教はれないことになる。併し釋迦

牟尼はその二乗をも佛にする力を有つて居る、その間違つた考へは佛に成るのではありませぬが、それは直せば如何なる者でも直るのである、小人も君子となり、二乗も菩薩となり、如何に利己心な者でも慈悲仁愛の考に進むことが出来るのである。二乗根性があつたからと云つて直ちに捨て去るべきではない、何處までも教化してそれを向上せしめ、さうして之を教ふ力を有つて居る教でなくてはならない。現在間違つて居る人間だから皆な捨て去らしまへといふことはいけぬ、間違つた人間も教へ導いて改過遷善せしめ得るといふ教化の可能——直し得るといふ信念の下に立つ教でなければならぬ。そんな者は仕方がないと云つて捨てるのは非常に悪いことである、といふ事を書いたのがこの御遺文の精神であります。次は

災難對治鈔

であります、これは日本に起る種々の國難或は天災、この大きな災ひを除くにはどうしたら宜いかといふ問題で、人一個の小さな祈念を言ふのではない、個人に起る災難の問題ではなくして國家の上起る所謂全体の國難、その大きな災難を攘ふ力は何處から來るかといふことを論じたのである。それには正しき教を尊重しなければならぬ。神、佛の中にも善神、邪神があつて、人間が墮落して悪い教の方に行つてしまへば邪神が勢力を得る、人間が善き教に依り、善い事の方を能く行ふやうになれば、神様の方も善神が榮えるといふことになる。それ故に唯だ神様に對つて「護つて呉れ〜」と言ふだけではいかぬ、自から正しき教に依つて徳を積んで、正しき神様が勝つるだけに努力しなければならぬ、それ故に法華經を盛んにし人間を善くして、神と神との闘ひの中にも善き神が勝つやうにせんければならぬといふ事を書いたの

が、この「災難對治鈔」の根本精神であります。一ヶ所要文を御紹介すれば、

佛法已前に五常を以て國を治むるは、遠く佛智を以て國を治むるなり、禮義を破るは佛の出し給へる五戒を破るなり。問うて曰く其の證據如何、答へて曰く金光明經に云く一切世間の所有善論は皆此の經に因ると。法華經に云く若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説んも皆正法に順せんと。(遺文錄)

その他いろ／＼引證してありますが、この一段は善を行ふことを廣い意味に解釋せられて、唯だ法華經を讀み宗教的の祈禱祈禱をする爲に國家の災難を攘ふといふ風に説かないで——よく世間でも御祈禱會といへば信者が寄つて、朝から晩まで讀經唱題をして祈願する、さうすれば國難が除かれるといふ、それも悪い事では無いけれども、さういふ風にのみ日蓮聖人は見ては居ないのである。國の災を除くには、人心を徳教の方から、道德的に人格を直して行かなければならぬ。これ故に必ずしも佛法といふ必要も無いと迄言つてある、人倫五常の道德を盛んにすれば國が治まる、善神が榮えるといふ。この世間でいふ人倫道德、日本の今日にして言へば教育勸語に依つて示された國民道德、その徳風が盛んになることに依つて、人格が上り、國家が榮え、冥々の裡には善神が力を得給ふといふことになる。それは自から佛の教と合して居るものであつて、佛の教といふものは人間の道德を忘れたものではない、やはり五戒を重んずべきことを教へられた、それは支那で五常と言ふと、印度で五戒といふとは同じもので、世間一般に踐むべき道德を指して居るのである。法華經には神祕的の御利益もあるけれども、法華宗は唯だお經を讀み神祕的の利益だけを主張するものだと考へると、それは二つの中の一つを知らないことになる。殊に日蓮聖人の、五常を以て世を治めるのが自から佛の教に合すると言はれた點をも、能く味はなければならぬ、乃木大將の

やうな人が出て、「それは別に毎朝お勤行をした人でもないから法華の信者ではないぢやないか」と言つて、之を尊崇しない人があるけれども、さうではない、それは自然に法華經と合する點が多々あるのであつて、あゝいふ人はその人格が法華經的に出来て居つて、一舉一動みな立派な道德に合して居るからして、確に佛智に契ふ人だといふことを、日蓮主義者は認めて置かんければならぬ。それは他の聖訓にも澤山に出て居るので、太公望がでて殷の世の亂れを直したのも、張良がでて秦の世の亂れを直したのも、これ皆佛の使なりと迄日蓮聖人は言つて居るのである。だから日本で言へば楠公でも乃木將軍でも、あゝいふ偉大な人々はやはり佛の精神に副ふものだといふことを認めないと、「法華經を披けて讀まん限りには駄目ぢや／＼」といふことになつて、讀みさへすればどんな人格の壞はれた無茶漢でも、題目を唱へて居れば生きながら佛ぢやといふやうなことになつて來ると、人間の道德標準を打壞はしてしまふから、さういふ意味の宗教が一方に盛んになつて來ると、一般的道德は地を攘ふことになつて行くのである。これは淨土門などに存した弊害であるが、法華宗も大分そのお伴をして行き居る、方面は違ふけれども觀念は同じ事になりはせんかと思ふ。それは餘程大きな問題である、學校では教育勸語が大事だと教へて居る、所が家に歸つて來ると「そんな物は無くても宜い、お題目さへ唱へたら宜い」といふやうなことを言ふ者が出て來る、だから日蓮聖人はさうでないといふことを言はれて居るので、唯今の文に於てその事を徹底的に記憶せんければいけない、これは『立正安國論』の精神でもあるし、日蓮主義を貫いて動かぬものであることを、坊さんも信者も了解しなければいけない非常に大事なことである。將來法華宗が、文部省の方からも宗教を撰ぶならば日蓮主義に限る、陸軍省の方からもさういふことを認められるかといふ問題になつて來

ると、この點が非常に大事なことになつて來る、之を狹隘に解釋して行つたならば、法華宗が大いに物與すべき機會に、解釋が固陋な爲に、モウ少しの所だけれども、「善いとは思ふけれども之を採用すると斯ういふ害がありはせぬか」といふ所に引懸つて、折角一舉にして日本の思想界を風靡すべき好機を逸することがあると思ふのである。それはこの頃の平凡な者の考へて居るやうな、三人か五人信者が殖えて行くといふやうなことで日蓮主義は終りを告げるものではない、「日本國一度に信することあるべし」と日蓮は斷言して居る、その時期を一日も早く造るべく、それ迄吾々が努力を續けるのである。その時になつて自分のやり方が悪い爲に此處に引懸る、彼處に引懸るといふことでは、如何にも日蓮聖人に相濟まぬことが出來ると思ふ、その意味に於てこの御書を御紹介したのであります。次は

十法界明因果鈔

といふので、いろ／＼生れかはり死にかはりする間の因果應報の有様を説かれたので、斯ういふことをすると地獄に行く、斯ういふことをすると餓鬼に行くといふことを事實に依つて説明されたもので、その中に殊に地獄の事が詳しく説いてあります。それは佛敎一般の普通の説き方でありますから、特に申上げ程のこともないと思ひますが、唯だ一箇處御紹介すれば、

法華經に云く聲聞の法を決すれば是れ諸經の王なりと、阿含經即法華經といふ文なり。一佛乘に於て分別して三と説くと、華嚴、方等、般若即法華經といふ文なり。若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説んも、皆正法に順せんと一切の外道、老子、孔子等の經は即法華經といふ文なり。(道文錄)

斯ういふ事が書いてある、これは法華經の圓融の理想を現はしたので、この文に依れば阿含經が直ぐ法華經と同じ意味になる、これに依れば華嚴、方等、般若の諸經も法華經と同じ事になる、この文に依れば世間の老子、孔子の敎も法華經と一致するといふ、廣く圓融の精神を言ひ現はしたものである。これも非常に大事なこと、彼等の敎の足らざる所のあるを指摘するばかりが法華經の立場ではない、その缺點を指摘すると同時に、之を活かして法華經の精神に一致せしむる所の融合力、同化力を持つて居るのが法華經の偉大な所である。併しそこに大いに注意しなければならぬのは、下手に同化をやると混同になつて滅茶々々になつてしまふ、法華經の開會ならば念佛でも法華でも同じものぢや、猫も杓子も同じ物かといふ問題になつて來るのである。そこで違ふ方面と引合せる方面とに就て、餘程精確な考を要するのである、それが模範的に行つて居るのが法華經であり日蓮主義である。今の思想界の問題でも、譬むべき點と許すべき點とを厳正に見別けなければならぬのである、許す方から言へば無闇に腹袋を大きくして、清濁併せ呑むやうなことを言つて、「ナーニ西洋の思想と言つたつて皆結構なものぢや、兎に角文明的に出來て居るものぢや」と言つて、洵に大難ばなことを言うて居る人が澤山ある、さうかと思つても何かも氣にして、非常に頭痛に疾む人もある、けれどもそんな神經衰弱みたやうなのと布袋様みたやうなとは、ごつちもいかぬと思ふ、嚴密に調査をして譬むべきを戒め、活かすべきを活かすといふ、法華經が一切經に對し他の思想に對してやつたこの態度、日蓮が日本の思想界に盡した態度が、今日も吾等の思想を選ぶべき模範なりと信する。法華宗は唯だ小言を言つたり、氣の狭い事ばかりいふものぢやと思つてはいかぬから、そこで阿含經即法華經、老子孔子の敎即法華經といふ事を能く理解して居つて、さうしていけない所はいけ

ないとして攻撃し居ることに留意しなければならぬのである。これは大事な問題であるから、唯だそれだけの事を申しただけでは事は盡きないけれども、大体の法式がそこに能く分るのである。局外から日蓮は頑固だとか、排斥的だとかいふがさうではない、活かす方から言うたら日蓮位大きく活かした者はないのである。他の者は入れるやうな入れぬやうな生半熟である、日蓮は警むべき所と取り入るべき所とをよく考へて徹底的にやつて居る、今でも取るべきは取り捨つべきは捨てるとか、善きを取り悪きを捨てるとかいふことは誰でも言ふけれども、果してどの點が善くてどの點が悪いかといふ調査にかゝるには、十分の識見を有たなければならぬ。それにはやはり法華經なり又は日蓮のやつた態度が實に模範のものであると思ふ、あれだけに思想界に就て取捨判断をやつた人は無い、佛教に於て無いのみならず、世間の學者にも無い、今日の學者にも無い。今の日本の英魂はそこにあるだらうと思ふ、誰の頭腦でも考へて御覽なさい、それ程の抱負を持つて居ない、西洋の學問をした人は誰だその西洋の學問の一角を紹介することに努めて居る者である、決して善きを取り悪きを捨てるといふことを嚴密にやらうといふ責任と抱負を持つて事に當つて居る人を發見し得ない。議會などでも思想問題などいつて見た所が、壓迫するとかせぬとかいふ位の事で、洵にボンヤリした事を言うて居る、質問した方も分つたのか分らんのか知らぬけれども、そこで済んで居るやうである、あんな事は言はんでも判つて居るであらうと思ふ、モウ少し眞面目に打込んで行かなければならぬ。日蓮聖人が命懸けで正しきを正しとし、曲れるを曲れりとして、それが爲には命を擲つといふ眞劍勝負でやられたあの態度は、今日も確かに日本人の模範であらうと思ひます。次は

唱法華題目鈔

これは最も一般に能く知れ渡つた御遺文であつて、今の平法華といふやうなものは、この御遺文の精神が普及したものとと思ふ、昔の説教者はこればかりやつて居つたやうである、これは悪い事ではないけれども足らぬ所がある、大体茲に法華の普通の觀念が現はれて居るのである。これには批判を要するのであるが、批判の爲に二三御紹介して見れば、先づ本尊の事に關して珍ういふ事がある。

問うて云く法華經を信せん人は本尊並に行儀並に常の所行は何にてか候べき。答へて云く第一に本尊は法華經八卷、一卷、一品或は題目を書いて本尊と定むべしと法師品並に神力品に見えたり。又たへたらん人は釋迦如來多寶佛を書いて造つても、法華經の左右に之を立て奉るべし。又たへたらんは十方の諸佛普賢菩薩等をもつくりたてまつるべし。行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし、道場を出でては行住坐臥を悉らふべからず。常の所行は題目を南無妙法蓮華經と唱ふべし。たへたらん人は一偈一句をも讀み奉るべし、助縁には南無釋迦牟尼佛、多寶佛、十方諸佛一切の諸菩薩、二乘天人龍神八部等心に隨ふべし、愚者多き世となれば一念三千の觀を先とせず、其の志あらん人は必ず習學して之を觀すべし。(三四〇)

これが本尊と信仰との上に於て、ごつちも完結をつけて居らぬのである、「佐渡以前の法門は佛の爾前の經と思召せ」と言はれたのは、斯ういふ御遺文に對していふのである。爾前の經といふのは方便が混つて居るといふことである、佐渡以前の日蓮の意見には、方便が混つて居るから、大事な本尊と信仰の問題が不

徹底である、どう不徹底かと言へば、本尊は法華經一部を置いて宜し、中の一巻を置いて宜し、一品を置いて宜し、或は題目を書いても宜し、お釋迦様を加へても宜し、普賢菩薩を加へても宜いと云ふやうになつて居る、洵にそのやり方が茫漠として居る。未だ曼陀羅をお示しなさらん時であるから、いろ／＼のものが出て来る、たへたる者は何でも後から加へて宜いといふのであるから、勝手なものが出て来る。今の平法華の佛壇は丁度左様なものである、鬼子母神を信心するから本尊には鬼子母神を置いて置く、金が欲しくなつたら大黒様に取換へるといふやうな工合で、あとから／＼追加して行く、必要に依つて追加されるので、最初から完備したる一闍浮提第一の本尊、輪圓具足、一點の缺け目が無いといふやうな意味で現はれては居らぬ。これが即ち眞實を顯はして居らぬ證據である、その顯はさぬ方が一般に及んだのが平法華といふものになつたのである、信仰の意識も洵にボンヤリして居つて、南無妙法蓮華經と唱へるが宜いが、併し他の佛様や神様の名前を言うても宜いことになつて居る。併しその方は餘り流行らなかつた、唱へ言葉としては「南無妙法蓮華經」が廣く行はれて、「南無普賢菩薩」といふやうなことは餘り言はぬけれども、併し頭腦はさうなつて居る、南無妙法蓮華經に依つて満足せずして、鬼子母神様とか帝釋様とかに行き、併し唱へる言葉は南無妙法蓮華經であるが、對手は鬼子母神といふ事で、妙法蓮華經が稀薄になつて居る。それから後前に「頼みます」といふことは、それはモウ鬼子母神になつたり帝釋様になつたり、いろ／＼の信仰意識が分裂して居る、それはこの思想から來て居るものである。それから又たとへたらん者には一念三千の觀を許すやうな文章がある、愚かな者はお題目だけ、賢い者は觀念を加へてやれといふことになつて居るから、之をへまな學者が覺えて居つて、「俺達は坊さんで學問した者であ

る、お前等在家の者は唯だ題目を唱へれば宜い、俺達の方は些つとは觀念もやる」といふので、天台宗やら日蓮宗やら行らぬことになる、總ての教義解釋が天台の袋擔ぎになつた者が澤山出て來た。併ながらそれは非常な間違ひで、「觀心本尊鈔」「立正觀鈔」等に示された所に依れば、觀念の極點に信仰を打立てて哲學の眞理の上に宗教の信仰を立て、居るのである。智慧がえらい者は觀念をやる、俺達はあかんから信心をして居るといふのではない、ごんな偉い者でも智力で研鑽した以上に必ず信仰に入るべきで、又智力の研鑽の不十分な者がこの信仰に入るのも、この信仰點に達した時に於ては、日蓮の信仰も吾等の信仰も同一點に居るといふのが信仰の状態である。愚かな者は信心して居れ、賢い者は觀念に來いといふやうな教は、信仰意識の説明が完結して居らぬことになる、それは「立正觀鈔」にも言はれて居る。

本地難思の境智の妙法は透佛等すら思慮に及ばず、何かに泥んや菩薩凡夫をや。(遺文錄)

この絶對の境界は佛でも進門以下の佛は手がつかぬ、菩薩以下は勿論論するに足らぬ、して見ればこの偉大なる妙法のそこには、信仰を以ては到ることが出来るけれども、吾等の理解を以て分解することは到底及ばぬことぢやといふので、智慧を進めて信仰に入つた。信仰すべし識得すべからず、信じて事へることは出来るけれども、理解を以てそれを自分の所有にすることは出来ない。丁度親子の關係の如きもので、智力を以て益に或る一人の者が大先生の側に行つて、さうして先生と同じ様な位地に登ることは出来ないけれども、この温かき親であり子であるといふ感情を以て行けば、ごんな者でもこれに接近し得るのである。陸軍の大將に對して、軍事上の事や何かの自分の能力に依つて同じ程度に行かうといふには、中々十才や十五才の者は側へも行かれんけれども、親子の情を以て行くならば六つか七つて子供でも側に行つて

際の上に抱いて貰ふことが出来る、接近することが出来る、そこに宗教の妙味がある。又洵に明かだと思ふのは——例に引いては畏れ多いやうであるけれども、位であるとかその身分であるとかいふものを以て言へば、至尊陛下と吾々とは非常な隔りがあるけれども、陛下の大御心の吾々を愛し給ふこと、吾々が陛下に忠節を捧げんとするこの勤王の精神とであれば、ごんな所にも近寄ることが出来る、一兵卒たりと雖も、陛下の御側に接近することが出来るのである、さういふ風な意味が一番よいのである。それが博士の學問で天子様に近寄れるか、國民の忠誠の真心に依つて近寄れるかといふことになつたならば、學問の方から近寄ることは一寸難かしい譯である。であるから智識を以て信仰よりも高いと考へて居るのは間違つて居る、知識を排斥することは無いけれども、智識の極點に信仰が立てられて居るといふのが正觀である。「愚者多き世なれば」と言つて、馬鹿が多いから信心しろ、「その志あらん人は」と言つて、賢くてやれる者は「修學して之を觀すべし」で「觀念をやつても宜しいといふことになる」と「俺は愚者の中に入つては居ない、賢い人間だ」といふので「觀念をやる」「お前は信心しろ、俺はこつちだ」といふやうなことで、そこに生熟のものが出来る。本當に止觀の觀法を積んで、智慧の方から悟るだけの力もない、又熱誠なる信仰を以て行く者でもないから、二途不攝と言つて、鳥にもあらず獸にもあらず、蝙蝠みたやうな物になつてしまふ、信仰の熱もなければ智力の悟りもないから、生半熟な、お粥でもなければ飯でもないといふ出来損ひに成る。さういふ半熟の坊さんが人々を教化したのであるから、結構な法華宗が今日やうながんだ飯になつてしまつた、本當に徹底して行けばこんな風になるべきものではないが、今日迄の大部分の日蓮門下の書物といふものは、皆このがんだ飯の頭腦から生れた物である、未だ——そのがんだ飯

の系統を逐ふて居る者が一パイ居る、宗學校での教育もがんだ飯の本を教科書にして、半熟の事を半熟の者が教へて、半熟に學生を造るのだから、段々變手古な者になつてしまふ、幾ら教育しても碌な者は出来ない。それは要するに不徹底である、智力の方で行くならば極く精明なる研究を積んで、その中に熱烈なる信仰に到達せんければいけない、であるから斯ういふ「法華題目鈔」のやうな御文章を、佐渡以前の教義として不備なる所以を明かにし、日蓮聖人の遺訓と誰も之を本にしてやつて行つたら間違ひが起ると説き示し、同じ佛法でも方便の教に囚はれ、誤解に陥るも同じである。斯ういふことは、學問の方では佐渡以前に眞實を顯はして居らぬ證據に引くのである、それを「観玉集」といふ今迄在家の机の上に置いた書物は、本尊の問題などに就ては遺文の中でこの「法華題目鈔」一つしか引いて居らぬ、それは身延の日重といふ學者が引いたのであるが、實は學者でも何でも無い、一番間違ひ易い處を一つ擧げて置くといふやうなことでは、學者といふことは出来ないか。そんな事では豫科の試験さへも落第ぢや、本尊の聖訓を書けと言はれて遺文を引證するのに、こんな所だけ引いたら、豫科の一年生と誰も及第させることは出来ぬ、それが身延の「重乾遠の三師」と言つて、學者の歳頭だといふのだから危ないものぢや。それ程間違ひなければ、この結構な日蓮門下が斯うは成らなかつたであらう、吾々が平生言ひ居るやうな意味で、之をズツと繼續してやつて來たとしたならば、モウ今頃は疾に日本の佛敎界、思想界を席捲し終つて居るものである、それをどつち附かすのやうな事を言つて居つたから、日蓮主義の頭腦を分解して見ても、薩張り價値が無いと言はれたのである。

それから同じ遺文の終りに、信仰を正すれば不思議な奇蹟みたやうな事を表にしてはならぬと戒められ

て居る。これは大切な御聖訓であります。

但し法門を以て邪正をたゞすべし、利根と通力とは依るべからず。(三四七)

教の筋を以て善し悪しを見別けなければならぬ、賢い人とか、奇蹟を現はしたからといふやうなことに騙されてはならない、随分左様な通力みたやうな事をやつた人はあるけれども、決してそれが爲めに教が正しいとは言へない。支那に於ても道士と名くる者があつて、鬻波といふ人は雲を吐き、張階といふ人は霧を吐き出すといふやうな事があるが、息を吐くと息の中から霧が出たとか、瓢箪から駒を出すといふやうな者がある。沸湯の中に手を突込んで、一寸變つた者が出て来る、心理學的に言へば潜在意識の作用で、お筆先でいろ／＼のことを豫言したり、一寸變つた者が出て来る、心理學的に言へば潜在意識の作用で、通常人の及ばないやうな能力が出て来る。さういふ不思議なやうな事が澤山あるが、それは決して正しいものではない、昔はそれを「靈道」といつて、先づ狐使ひみたやうな意味に言つてある、さういふ者の不思議を有難がるのはいけない、それが殖えたとその人もその國家も害を受ける。露西亞が今日のやうな事になつたのも、何とかいふ坊主が宮中に入り込んで、皇后が第一その迷信に囚はれたものである、その坊主が悪い奴であつてトウ／＼えらい事になつて、終ひにはその坊主は殺されたけれども、それに迷うたのが事の起りである。朝鮮でもやはり嚴妃といふ者があつて、それに迷信がついて居り、日本に反對して仕方が無いので、誰が殺したか知らぬけれども、トウ／＼嚴妃を打殺して漸く事無きを得た、若も彼が生きて居つたら朝鮮を露西亞のやうにしてしまつて、必ずや日本の横腹に劍を突込むことになつたに相違ない、迷信の結果は恐るべきである。随分大きな問題も迷信の災禍となつて起る、日蓮主義が天下を教へて行くに

就ては、迷信の仲間入りをして狐使ひ、狗神使ひ、八雲見のやうな態度を歓迎するのはいかぬ、日蓮主義は「天下の皇居に居て天下の正位に立ち天下の大道を行ふ」と孟子が言つたやうに、一國の民心を指導して行く上の大徳教として立たなければならぬ。日蓮聖人が「法門を以つて邪正をたゞすべし、利根と通力」とは依るべからず」と言はれた。慈恩大師は十一面觀音の化身であつて、牙から光を放つたとか、善導和尚は彌陀の化身であつて口から佛を出だす、南無阿彌陀佛といふと阿彌陀様がびよつと出るといふやうなことを言つて居る、「この外の人師道を見れば徳をほごし、三昧を得得する人世に多し」で、一種特別な能力を發揮した者は坊さんの中などに澤山あるけれども、それが必ずしも佛法の權實正邪を辨へて居るものではない。印度に於ても婆羅門の中に奇蹟を行ふやうな者が澤山居つた、支那にもいろ／＼居つたけれども、そんな者がえらい者ではないといふ事を論じてあるのであります。

宗教を奇蹟の方から見るといふことは、始から日蓮主義が反對して居る所である。基督教などは奇蹟的で、奇蹟を除いたら基督教の信仰は無いと言つて騒いだ位であるが、併ながら今は奇蹟は信せられなくなつてしまつた。そこで基督教は勢力を失ひつゝあるのである、日蓮主義は奇蹟を根據にした宗教でない。事實には日蓮聖人には基督教以上の奇蹟がある、基督が磔になつてしまつてから蘇生つて天に昇つたといふけれども、磔になつて蘇生るといふことはどうもをかしい、それも大勢は見ない、一人か二人見た、一緒に居つた人でも一方には見えて一方には見えないといふやうな事であるから、餘程變なものになつて来る。けれども日蓮が龍の口で頸が斬れなかつた事實、それから佐渡にも行つて居るし、澤山書物も書いて居るから、これは斬られなかつた事が明かである、これ等も奇蹟の眼から見れば「江の嶋の方より一寸餘

りの光り物、鞘の如くに飛び來たり」といふから、奇蹟好きな人であつたならば、えらいことぢや、從來刀が折れたから日蓮聖人はえらいといふやうな事を俗信家は言つて居た、けれども吾々は演説の中に「それ見い、日蓮は刀が折れたから偉いぢやないか」といふやうなことは、今日に至る迄私が幾ら演説をしても、さういふ論法を用ひたことは一遍もない、殊更に避ける譯ではないが、頭腦がそんな風には出來て居らぬ、唯だあそこに日蓮聖人の真心が現はれて居る、殊に信仰の誠が現はれて居るといふことは言ふけれども「光り物が飛んで來たから、それ見い日蓮は偉い」といふやうな論法は決して用ひない、日蓮聖人もそんな書き方は一つもして居ない、同じ事でもさういふ事は言はいても宜いのである。その時頭が斬れても構はぬ、頭が斬れないからえらいのではない、その主張がえらいのである、正しいのである。それを法華の人々が能く考へないで、唯だやはり奇蹟風に日蓮聖人を崇拜する觀念が強くなつて、教の正しかりし事を忘れる時、日蓮聖人の思召は隠れて仕舞ふことを了解しなければならぬ。次は

立正安國論

であります、これは全文を御紹介致しました、廣本と言つて詳しく書かれたのと、一般に用ひて居るとの兩方ありますが、これは別段大した違ひはない、全部「聖訓要義」として講述したこと故に、重ねて申す必要もないと思ふ。次は

一代五時圖

といふので、これは一切經に就ての判釋の事が書いてある、さうして法然上人に關しての事が少し論じてある。次は

今此一界合文

といふので、釋尊の主師親三德に關する經文を擧げられて、それに關する先師の釋を其處に並べられて居る。これは日蓮聖人が自分の參考に書いてお置きになつたのであつて、人に示す程の考へでお書きになつた物ではなからうと思ふ、唯だ手控である。前の「一代五時圖」なども手控になさつた物である、唯だ眞筆が遺つて居つたので、遺文の中に入れて居るのだけれども、本當の編纂にすればさういふ手控みたやうな物は別に纏めて、日蓮の主張として天下に發表したものを、それだけ集めるやうな風にしたら宜いと思ふ。自分も壽命があつたら遺文の編纂を改定して見やうと思つて居りますが、唯だ斯ういふやうに編年順に、手控の爲に箱の中に藏つてあつたのも、熱心に主張した事も同じやうにザラ／＼並べると、初めて見る人はそんな事は判らぬから、之を同じ價値として讀んで行くやうになる、それは見る人が餘程注意しなければならぬ。次の

後五百歲合文

も同じ事で、法華經が末法に弘まるといふ事に關しての經文なり釋なりの抜書をされた迄の物である。次の

といふのは、日本の眞言の歴史系統を書かれて、眞言の言ひ分を並べられただけのもので、これも自分の参考書に書かれたものであらうと思ふ。この材料に對して後に日蓮の意見が出て來るのであるが、その意見は書いて無ので、唯だ材料として書いてある。斯ういふ物は今申す通り別に集録すべきであらうと思ふ。それから

椎地四郎殿御書

といふのがあります。これは法華經の「如波得船」といふ事に就いての美しい文章でありますけれども、特に取出して申しませぬ。次は

船守彌三郎許御書

で、これは非常に感激の多い文章であります。日蓮聖人が伊豆に流されて、船守彌三郎に依つて教はれ、實際艱苦の中に經歷を書かれたもので、そこに日蓮聖人の人格が活躍して居る、斯ういふ文章は大いに親炙すべきである。唯だ何か参考の爲に書いて置かれたやうな物は、左程の價值があるものとは言へない、結構な物と言へば結構な物だけれども……。併しこの船守彌三郎に與へられたやうに、聖人の動いた精神、活きた精神の筆に寫つて居る物は、言々句句實に尊といひであります。所がその方は假名混りて書いてあ

るものであるから、何だか價値が無いやうに昔は考へた、一方は四角い字が並んで居るからその方が有難いといふやうな頭腦でやつて居つたのであるから薩張り駄目ぢや。

日蓮去る五月十二日流罪の時、その津に着きて候ひしに、未だ名をも聞及び參らせず候所に、船より上り苦しみ候ひき所に、懇ろに當らせ給候ひし事は如何なる宿習なるらん、過去に法華經の行者にて渡らせ給へるが、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて日蓮を憐れみ給ふか。假令男は然もあるべきに、女房の身として食を與へ洗足、手水其の外さも殊惡なる事、日蓮は知らず不思議とも申すばかり無し。殊に三十日餘りありて内心に法華經を信じ、日蓮を供養し給ふ事いかなる事の由なるや、斯かる地頭萬民日蓮を憎み妬む事鎌倉よりも過ぎたり、見る者は目を惹き聞く人は怨む。殊に五月の頃なれば米も乏しかるらん日蓮を内々に育み給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈といふ所に生れかはり給ふか。(遺文録)

日蓮が伊東に流された時に、船守彌三郎が助けて呉れ、又その女房が非常に親切にして呉れたが、如何にも有難いと感じた、これは自分の母が生れ代つて斯様に親切にして下さるのかと思つて、實に感激したといふ事が書いてある。更にその次にはこの夫婦は母の生れ代りかといふ事から、進んで大覺世尊即ち釋迦如來の魂ひが入つて親切にして下さるのかと迄書かれて居る。

然らば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかはり給うて日蓮を助け給ふか。(四一四)
この母の生れ代りとして考へて、親の恩に感激する心を取つて船守夫婦に感謝し、又佛の魂ひの入り代りと考へて、釋尊に感謝する精神を移して二人に感謝されて居る。茲に親に對する日蓮聖人の孝養心、と佛

に對する信仰の心が何時も動いて居ることが判るのである、人に「有難い」と感謝するにも佛の事を思ひ實際精神の現れが斯の如くに説かれて居るのである。次は

善神擁護鈔

これは善神が正しい者を守るといふ事に就て簡単に書かれて居る。それから

同一鹹味御書

は海の鹽に依つて、海はどんなに水が流れ込んでも皆鹽水になるが如く、法華經に入り來るものは如何なる教も混然として一つになつて、法華經の味ひに變るといふ事を書かれた。次は

四 恩 鈔

これは伊東に流罪中に書かれた有名な文章であります、父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩の四つに關して詳細にお説きになつて居りますが、一箇處御紹介すれば、

三には國王の恩、天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に神を養ふこと皆是れ國王の恩なり 其の上今度法華經を信じ今度生死を離るべき國王に値ひ奉れり、争か少分の怨に依つておろかに思ひ奉るべきや (遺文錄 四二一)

國王の恩の説き方に於て有難い意味があると思ふ、唯だ天子様が親切だからといふやうに言はないで、「天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に神を養ふ」のも皆國王の恩であると言はれた。お日様が照して下さるのは別に國王の關係が無いぢやないかと今の人は言ふだらう、「ナーニ人間到る處お天道様は照して居る、此處ばかりが日が照るのぢやない」などと不貞腐れを言つたり、今の人道主義などでも「日本ばかり日が照るのぢやない」といふやうな考へになつて居るが、天の三光に身をあたゝめるのも國王があつて國家の平和、秩序が得られんければ、落つて日的光を受けることも出来ない、地から覆れる穀物に命を繋ぐのも、やはり國家の平和の中にあることである。それは露西亞の現状を見れば直ぐ分かることで、あの混沌たる状態になつてしまへば落つて日的光を受けることも、食物を攝ることも出来ない、洵に恐しい有様で非常な恐怖の時代を現出して、晝夜ともに平和な生活を營むことは出来ない譯である。さうなればお日様に照して貰つて居る氣もしないことになつてしまふ譯である、「今日はお天氣だナー」と言つてお日様を見、或は「上野の櫻が咲いたさうだ」と言つて花見に行く、それも皆國王の恩と感謝しなければならぬといふのである。この説き方に洵に善い意味が現はれて居ると思ふ、大抵の者ならば「日本の天子様は親切だから」といふ所であるが、「天の三光に身をあたゝめ」と説き出された所に、聖人の思想の如何にも秀で、居ることが見られると思ふ。次は

教機時國鈔

であるが、これも既に全文を講述を致しました。それから

行者佛天守護鈔

は、法華經の行者は佛も神も皆お守り下されるといふ意味合を述べられて居る。次の

顯謗法鈔

は、法華經に反對する結果は地獄に墮ちるといふことに就て、八大地獄の因果、中にも一番恐ろしいのは五逆罪と言つて、父母を殺す罪、佛に對する罪、佛の教に對する罪であるといふやうなことを論ぜられて、今日日本の人が正しい教に反抗することは最も恐ろしい所以を説き、最後に弘經の用心―法華經を弘めるに就てはごういふ考へにやつたら宜いかといふ事が餘程詳しく書いてあります。これは日蓮主義者が教を弘めるに就て注意しなければならぬ所であるから、この點を御紹介します。

第四に行者佛法を弘むる用心を明かさば、夫れ佛法を弘めんと思はん者は、必ず五義を存じて正法を弘むべし。五義とは一には教、二には機、三には時、四には國、五には佛法流布の前後なり。(四四七)

諸大乘經の中の理は未開會の理、いまだ記小久成これなし、法華經の理は開會の理、記小久成これあり、諸大乘經の者が法華經を破するは謗法となるべし。(四五五)

同じ大乘經と言つても法華經には二乗作佛の佛性論と、釋尊の顯本に就ての本佛論の二つがある、佛性論の本佛論の二大教義が法華經の特色であるといふことをお示しになつて居る。それから涅槃經を引かれて、

涅槃經三十六に云く、我れ契經の中に於て説く二種の人あり佛法僧を謗すと。一には不信にして瞋恚の心あるが故に、二には信ずと雖も義を解せざるが故に、善男子若し人信心あつて智慧あること無き、

この人は則ち能く無明を増長す、若し智慧あつて信心あること無き、この人は則ち能く邪見を増長す、善男子不信の人は瞋恚の心あるが故に、説いて佛法僧實あること無しと言はん、信者は慧無く顛倒して義を解するが故に、法を聞く者をして佛法僧を謗せしむ等と云々。(四五六)

法華經を信すると言つても、その信仰が偏つて居つてはいけない、智慧と信仰の二つを擧げて、智のみあつて信仰を缺いたならば邪見の人となる、信のみあつて智を缺いたならば、無明と言つて譯の分らぬ人となる。それ故に正解と信心とを併せて、善き教を聽き正解を得て信心をすれば、邪見の失と無明の失を逃れて、正しい信者となる。單に信仰と言つて智を排斥する者も間違ひ、智に依つて信を排斥する者も間違ひだと説かれて居るが、日蓮の流に居る者はこれを忘れんやうにせよと言はれた。そこでドンドコ法華ではいかぬといふことになる、ドンドコ法華は無明を増長するといふことになつて、信心はするけれどもあの親爺さんどうも譯は分らぬ」と言はれるやうになる。又近代の研究家は、永らく研究調査はするけれども信心をせぬ人がある、それは智の要求にのみ傾いて信を失ふが故に、結局佛教を學んでも邪見の人となる者が尠くない。この邪見の人を作るのは新しい弊害である、無明の人を作るのは舊い弊害である。この新舊兩弊害に依つて何處までも日蓮主義が正しくならぬとすれば相濟まぬことであります。故にごちらの人も醒めて、智と信を併せて進んで行くのが日蓮聖人の大恩に酬ゆる所以であります。

教 觀 不 離

大僧正 本 多 日 生

二四

日蓮主義は教の重んずべき所以を力説するのであつて、一切の文化現象の中に教を明にし、教を正しうし、教を熾んにすることが最も大切なりと、命に代へて力説をされたのが、日蓮聖人一代の特色であります。同時にその教の善悪を選択することに於て十分の注意を拂はなければならぬ。さうしてそれは唯だ各個人の自覺に委すといふだけでは事が足りない、國家の明教を確立して、斯様な教が宜しいのであるといふ方向を示さなければならぬ、その教を選ぶの必要を力説する點に於て、日蓮主義は特色を有つて居るのである。さうしてその選り上げる教の實質内容は斯かるものであるといふ、その模範の教を闡明して、これが最もよろしいのであるといふ模範たるべき正しき教を提供したることに於て、日蓮主義が特色を有つて居ると思ふのである。

この教を重んじ、教を選び、その教の實質を明かにしたる點に於て、今日の我國にとつても、廣くは世界の文化に對しても、日蓮主義は今現にイキ／＼とした必要を示して居る所のものであらうと思ふ。現在我國に於て重大なる事柄は多々ありますけれども、その教を重んじ、教を選び、さうしてその教は斯かるものだといふことを明かにする事柄は、我が日本の今日にとつて最も大切な意味を有つて居ると思ふのである。一日も早くその事が完成をしない限りには、國民の人格が向上することも望みないことであり、隨

つて國運の隆昌、國民の幸福、往いて國家が果さんとするところの大使命を完うすることが出来ないではないかと思ふのであります。低い事で考へれば國家の興隆、國家の事業は多々ありますけれども、國家の唯一の事業といへば、どうしても此の正しき教を明にし、内に國民の人格を陶冶し、外に人類文化の向ふ所を指示して、斯くあるべきだといふことを示すのが、我國の唯一の使命天職であらうと思ふのであります。その中堅の問題、根本の問題に對して、日蓮主義は貢獻せんと努力しつゝ進んで居る所のものであります。

今日は未だ我が國民の自覺がそこに達しませぬから、少しは日蓮主義の價値を歓迎する人も出来て居るけれども、まだ全體としては噂話を聞いて居るやうな有様に止まつて居るが、併し國民が今申した點を眞に自覺するの日が來たならば、日蓮主義の眞價は躍然として茲に進んで行く譯であらうと思ふのであります。併しながら日蓮主義が左様に重大なる責任を帯び、重大なる任務を帯びて立つて居ることは、一日も忘れてはならぬので、唯だ普通の宗教や普通の教化事業が、その日／＼の間に合せを以て少しの盛衰興亡の事に氣を奪はれて、僅かばかりでも、あらゆる手段に依つて、それが旺盛の形態を示せば喜んで居るといふやうな、さういふ小智術策を弄すべき宗教ではないのである。堂々としてこの根本志願を擁護して進みさへしたならば、一時の盛衰、一時の運命の如きは問ふ所でないといふ、堂々たる信念、目的に向つて突進すべきである。僅に目前の人が迎へて呉れる、迎へて呉れぬといふやうな、その目前の嚮背に依つて態度を二三にすべきものではないのである。それは諸君が日蓮聖人一代の經歷をお考へになつたならば、只今私が申して居る事が日蓮主義の本面目であるといふことを發見するのであらう。

それ故に「逆も日蓮主義は教の實質を正して、決して一時の風潮だとか、社會の暗愚なる狀況に迎合したりしてはならないのであつて、毎も高く正しき教を掲げて我が國家の前途を照す、ご逆も正義の主張の中に終始するといふ、この潔き一片の道念に依つて日蓮主義者は働いて行かなければならぬ。

その場合に最も大切な問題がそこに現はれて来るのであるが、それはこの「教觀不離」の關係であると思ふ。「教觀不離」といふことは、教と、その教に導かれたる心得とが、離れることの出来ない關係を言ふのである。宗教の信仰意識が自分々々の勝手に依つて定められたものでは、それが間違つて居るやら、紊れて居るやら判らないことになつて行くのである。それ故に宗教の意識信仰、その心得といふものは、始終教によつて正されなければならぬのである。己れを虚しうして柔順に、正直に、教の指し示す所を守らなければならぬのである。併ながら左様に宗教の心得は教に基づくからと申して、教をのみ重んずるといふことがだん／＼流弊を生じて、例へば「法華經は結構である、有難い教である」と奉つて、だんだん上の方へこれを押上げて、錦の囊の内にに入れて佛檀の中の高い所へ備へ付けてしまつて、結構な教だ、結構な教だと言ひながら、己れの心得は教から斷れてしまふ。むやみに奉り過ぎて何が書いてあるのやら、そんな事が示されてあるやら判らぬやうになり、唯だ形式的に法華經を尊崇し、或は法華經を讀む坊さんを連れて来て、月に何遍か一部經を讀んで貰つて、お經の聲がすれば心持が宜いといふ位のこと、その教の内容と己れの心得とは全然没交渉になつてしまふといふやうな事は、これ亦非常な誤つた態度である。經典崇拜の誤れる觀念は、唯だ教は尊とい、吾等にわかるものではないといふやうな事から、教と自分の考が斷れて行く。又自分の考を尊ぶが爲めに、教は一時のもの、所謂月を指すの指である、吾々の心

得、それが實質であるといふやうなことで、最初はさほどに教を輕んじた譯でもなかつたけれども、終ひには教から離れて自分の考のみに流れて行く。例へば佛敎の宗派で言へば禪宗の流弊の如く、教を侮つて、一切經は閑文字である、反古紙である、教外別傳、不立文字と叫んで、本當のものはお經の外にある、文字を離れて外にあるといふやうな事の爲めに、いよ／＼譯のわからぬ所に落込んだ者もあるのである。教を尊ぶ方の流弊としては、朝から晩までジャブ／＼五年も十年も讀んで居るけれども、さてそのお經はどいういふ事が教へてあるか、それは一向知らない。拜んで居る對象も教に示された所とは全然違つた、下らないものを對境とし、己れの信仰意識も頗る低級亂雜なものになつて居る。佛の教とは全然違つた、殆んど婆羅門外道の考の如く、而かもお經だけは何十年も續いて、朝は暗い中からジャブ／＼讀んで居るといふやうな者が、世の中にはよほど澤山出来て居るのである。今日の佛敎信者の先づ大部分はさういふ者だと言つても宜い位である。「私は佛法を心得て居ります」「私は信心して居ります」といふ者が、正直に教からこれを學ばずして、唯だ宜い加減な人の話ぐらゐに依つて己れの心得を定めたり、又何れの宗旨を問はずして、大抵お經は讀んでも意味はわからぬものだ、頭から極め込んで居る者が多いのである、だからジャブ／＼續むだけは讀んでもその内容は少しも知らない。法華宗は無論であるけれども、禪宗が般若心經を讀んで居つても、それは唯だ般若心經を誦讀で覺へて居るだけのこと、その意味合といふものを知らぬ、こんな事は佛敎流傳の永き歴史の中に現はれたる淺ましき弊害である。

そこで是れが重大な問題にあらはれて、教をたゞ經典崇拜のやうな固陋な式で奉つて居るだけではいけない、又信仰意識なり心得を自分勝手にきめてはいけないといふ、この二つの大きな間違ひを一言にして

誦めた言葉が「發觀不離」といふことである。「觀」は觀念であるけれども、信仰といふものも、心得といふものも、すべて皆自分の心の方に教をうつして働いて行く場合が「觀」であるから、今日の言葉では所謂信仰意識と云つて差支ないのである。その教の側と、心得の側との二つが、ピッタリ合つて離れないやうに、始終注意をして行かなければならぬと思ふのである。

日蓮主義はその場合に「教」としては法華經が一番よろしいといふ事を主張するのである。法華經は釋尊出世の本懐として一切經の中に最も完備したる、最高無上の教である、般若經は法華經に及ばぬ、阿彌陀經は法華經に及ばぬ、その他の經々は遠く法華經に及ばぬ、法華經が第一であるといふことを、命懸けで主張したものである。それは頑固でもなければ排斥でもない、今申す「教」といふことに就て、この事は當然決定しなければならぬことである。擴げれば一切經だけれども、一切經どれもよろしいといふ事では適從する所を知らなくなる、だから排斥の爲ではない、擴げれば一切經であるけれども、中心を抑へれば法華經といふことは必然考へなければ、佛教の信仰は成立つものではない。そんな狭いとか狭くないとかいふやうな餘計な議論ではないのである、必然そうなければならぬ事である。

そこでその教の心得方が大事なので、日蓮聖人の出られる以前には、法華經にいろ／＼の事柄が説いてある、それを断片的に勝手々々に心得て信じて宜いといふやうな思想があつた。最初から日本の佛法は法華經中心の佛法として興つたのだから、聖徳太子であらうが、昔原道真であらうが、ズツと舊い時代の奈良朝の人達でもさかんに法華經を信じたのであるが、併しその時分には提婆品を讀んで唯だ提婆品が有難い……とにかく提婆品に女人成佛の事があるから提婆品が有難い、斯ういふ風に考へる。或は陀羅尼品

を讀んで鬼子母神が有難いとか、普門品を讀んで觀音様が有難いといふやうに、支離滅裂に法華經の一部々々の思想を取つて信仰をしたのである。さういふ事は法華經の教をよく知らない態度である。後に傳教大師が出られて、法華經に基いて摩訶止觀の觀法を教へて、法華經の深い一念三千の妙義に基いてこれを修行する方法を示されたが、併しそれも法華經の一方面であつて、法華經の全精神ではなかつたのである。

そこで日蓮聖人が出られて、法華經の心得方の整うた一番良い所をお教へになつたのである。教觀不離といふことは天台でも言ふやうであるけれども、それは法華經の教の或る一端に合して居るのであつて、その全精神、法華經を貫いて居るところの教の本當の意味合を意識信仰して居るものではないのである。たとひ立派な教を握つても、その教の中の一部部とか、或はそれが支離滅裂で奉戴されて居るものでは折角の寶も役には立たない。この法華經を纏めてさうして本當の善い心得方を教へたのが日蓮聖人であつたのである。即ち眞の教觀不離、教は一切教最第一の法華經、その心得はその教の全精神を纏めて過誤のないやうにこれを承継いで教へて下さつたといふ點に於て、如何にも日蓮聖人は有難い方であります。

然らばその教へられた意味合はどんな事か、此點がまた大事な所ぢや。その場合に日蓮聖人は太鼓を叩いて南無妙法蓮華經と言ふやうにした、天台に坐つて觀念をしたが、日蓮は太鼓を叩いて題目を唱へた、これだけの事でもつて日蓮聖人が働かれたと考へるが如きは、これ亦日蓮聖人が法華經の心得を完全に整頓して與へられたのに、その中の一小部分を唯だ狹隘に考へたに過ぎないのであつて、折角の整うた教をまた滅茶々に切離してしまつた思想と言はなければならぬのである。なるほど題目を唱へることも教へ

た、太鼓を叩くこともそれから後に起つただらうけれども、それでは法華經の御教が整うて正しき意味に吾々に傳はるものではないのである。

さういふ點の觀察が今日は非常に大事である。前に申した日蓮主義の帯びて居る使命、責任が重大であるといふことを考へて行かなければならぬので、唯だ一時目前の小さな盛衰興亡などは眼中に置くべきものではない。往いては日本乃至一國浮提廣宣流布の大願を達成するまでは、この佛教は一分一厘も傷を附けないやうに擁護し奉るのが吾等の任務だと考へるならば、折角懸命でお弘め下さつた此の尊い御教の意味合を、左様に低級なる貧弱なる因陋なるものにして、宜い加減な事で譯のわからぬ者の贊成を求めてごまかして置くといふやうなことでは、この血と涙を以て弘められた日蓮聖人に對して相濟まぬことである。即ち教を重んじ、教をえらび、教を明かにすることに依つて、各個人のみならず往いては日本の有する第一の天職を全世界に發展せしめようとしたる大聖人の御心に對して、唯だ太鼓を叩いて題目を唱へるだけだといふやうな事で終りを告げるといふことは、以ての外の心得である。そんな低級な者の手にのみ日蓮主義を委せて置くといふことは出来ない。それは信仰する者の或る形から言つたならば無論簡單なもので、掌を合せて南無妙法蓮華經と唱へる、これで一切が揃ふのだけれども、その教の意識、信仰の心得といふものはよほど嚴重に考へなければならぬ。

信仰と疾病

(其二)

醫學博士

石田 誠

岡山 三治郎

疾病は人間生活に於ける一の脅威であり病氣は人の精神を迷亂する、人間は病氣に罹ると狼狽する、そして不安を感じる、それが藥劑で治らず、醫療が果々しく利かないと今度は超自然的の力に縋らうとする、斯くして疾病を對象とする療病迷信が出現したのである。所謂、疾病迷信は、動機、形式、對象の三要素からなるもので動機は勿論治病であるが對象は、人格的崇拜、非人格的崇拜、人格非人格共通崇拜となり形式は祈禱、祭祀、苦行、物忌、絶ち物、禁厭等である。今試みに療病に關する迷信及傳説を擧げて見ると、奈良縣添上郡帶解村、帶解地蔵。伊勢國河藝郡白子町、子安觀音。上總國望陀郡老川、

御筒神社。筑前國五王山村、玉屋權現。等は出産に靈驗ありとせられ、下總國猿島郡中川村、香取神社内の女夫松の葉を照して服すれば安産であるとせられ、和泉國堺市、妙國寺内の蘇鐵の葉。京都加茂の葵は安産の守とせられて居る。又、東京府下羽田、穴守稻荷。日光の奥金精時、金精權現。紀伊國海草郡加太、淡島明神。肥後國飽託郡、弓削神社。安藝國嚴島、道祖神社等は泌尿生殖、器疾患者の請づる者多く、京都市新京極滿願寺内、唐守稻荷。河内國大戸村、石切劍箭神社。下總國海上郡鏡子、白紙明神等は皮膚病に。山城國乙訓郡海印寺、櫻谷觀音。日向國宮崎郡生目村、生目神社等は眼病に効驗あり

と稱せられ且、京都祇園會の標を門口につるすと傳染病豫防の効ありと。京都大原大原藥師の御供水は腹痛を治する。近江國野洲郡玉津村少林寺の遷雷符を所持すれば雷難を免がる等と稱せられて居る。尙滑稽であり奇抜なものは禁呪禁厭である。足の痺れに疊の音を額に張るとか、咽喉に骨の立つた時は「鶏の咽喉、くく」と三回唱ふと治るとか、濕疹には草に「馬」といふ字をかいて局所に貼布するとか、流行性感胃には「久松留守」と戸口にかいて貼布するとか、地方に依つて種々の迷信が行はれてゐる。

療病信仰の上に甚だ多くの交渉を持つものは所謂俗神道であらう、就中天理教は疾病を背景として今日の大をなしたかの觀がある、彼の信者の大多数は何れも直接間接に疾病と密接なる關係を有してゐる、殊に彼等は「疾病は天理教を信仰すれば治癒する」と宣傳布教して居る、心理學的に彼の天理教祖を解釋すれば妄想變質者の素質を澤山所有してゐる、「お

即ち彼にあらすして自己暗示の精神作用である、彼等の信仰に依つて潜動する自己の暗示意識の跳躍が治病の結果を生じたのである。

療病迷信は我國特有のものでなく、クリスチャンサイエンス等と稱せられて所謂先進國たる歐米各國にも猛烈に行はれて居る、若し古代から今日に至るまでの疾病迷信を枚擧したならば殆んど數ふるに遑なき程である、迷信の過半は何れも宗教的に潤色せられた、キリスト教然り、所謂俗神道に殊に甚だし、佛敎に於ても弘法大師は疾病治療に多くの關係がある。

學術智識の進歩し科學の發展した現代に於て今尙多數の療病迷信が盛んに行はれて居るといふことは尙に奇怪である。恰も石川五右衛門が「泥棒は永久に絶滅しない」と言つた如く是等の迷信は決して絶えぬであらう、否、寧ろ益々増加の兆候を示して居る。故に如何に迷信打破を叫んでも決して根本的に

道の實」は所謂天理教の病氣療養調である。天理教は病氣と言ふ動機から出發して教祖の確信となり遂に今日の基礎を築いた、而して同教信者中には宗教的妄想的迷信に陥り偏執又は變質の信念で自他の生命を危殆ならしめ社會の衛生思想に害毒を流して居る。

尙療病宗教と見るものに金光教、黒住教等がある、何れも病氣を背景として今日の勢力を張るに至つた。宗教は絶対眞理を以て其の根本として居らねばならない、而し其一面に方便と言ふものがある、眞理へ到達するために時に據りて方便を使ふことがある、天理教や金光教の治病は一つの方便であるかも知れないが動もすれば其れが本來の目的であるかの觀がある、従つて彼等の教理には不合理がある。而し彼の教徒は言ふ「一杯の神水で熱病が治り、一片の御符で難病が除かれた實例がある」と、迷障なる彼等は治病靈驗を斷定する。此等の所謂靈驗なるものは

迷信を打破し盡すことは頗る至難である、されど迷信の流行愈々激しければ益々世の進歩發達を妨げ貴重なる人命を危くし多大の害毒を流すものであるから一面に教育の普及を計り正當なる療病方法を示し他面には正しき宗教の信仰を鼓吹するの必要がある、殊に吾人佛敎徒は何處迄も正統なる信仰を以て科學的哲學的の釋明を下すべきである。尙注意すべきは彼の新聞雜誌等の六曜九星に關する運勢の公示である、本月の運勢はさうの、明日の運勢がさうのと、ぐだらぬ事を紙面に記載することは讀者に種々の感ひを起さしめ迷信普及の動機を作るものであるから速かに匡正すべきである。

毗耶城中の維摩居士が病瘵に於て見舞に來た文殊師利始め八千の聖者、五百の修行者に物語つた居士の言葉は尙に眞理に觸れた吾人への大教訓である。「眞理を障へる無明が因となつて愛着の心を起して生死の結果を招き之が爲めに病があるのだ、すべて

の人が斯様にして病むから自分も病むのである、若し總ての人に病がなかつたならば自分も又病む事はない、つまり聖者は生死を離れてゐるが諸有の衆生を救済するために假に生死するので、生死があるから病がある。若し諸人が病を離れる事が出来れば一切の聖者も亦病む事はない。丁度、子が病めば親も病み、子の病が治癒すれば親も亦癒ゆるやうなものである、聖者が一切有生を愛することは子を思ふ親に等しい、諸人が病めば聖者病み諸人の病が治癒すれば聖者も亦癒ゆるのである、故に聖者の病むのは究竟諸人の苦を抜く爲めである。

病者を見舞ふには、身は無常であると説いて而も其の身を厭へと説いてはならぬ。身は苦の聚りであると説いて而も消極的な寂靜涅槃の境を欣求することを説いてはならぬ。又身の無我であることを説いて而も其身に依つて諸人を救へ導かしめ、又身の空であることを説いても自己のみ寂滅の境に入ること

か？即ち自他、主観と客観とを離るべきである其の主客の兩觀を離れるには、心内心外のあらゆる實在を想はず一切平等の觀察をなすべきである其の平等は我も絶對の眞理も俱に「無」と知ることである何故ならばすべての現象は主観の作用に據つて起る其の主観の作用は又差別の迷習を基とし知覺思维分別を起す所に現れる、従つて主観の作用も客観の現象も亦是實在ではない、此の觀察を究竟すれば其處に疾病はない、只空に依つて起る空の疾病のみがある、然し空病も究竟すれば亦空である、斯の如く觀察して實在に執着する想ひを滅すべきである。

又聖者で病む者は、苦、樂、不苦、不樂に偏執すること無く之に因つて受くる所がない故に亦受けざる所なくすべての人が宇宙の眞理に覺證せぬから自己のみ寂滅涅槃の境に入る事をなさず、若し身に苦を得れば他の憐む者を思ひて其の苦を抜くべきである、既に自己の病を降すとすれば亦一切有生の病を

を説かず、過去の罪を悔ひさすとも其の罪に據つて過去にかゝはらしめず、己が病に依つて他の疾病を恐れみ、一切群生の幸福を思ひ自己が修むる福德と常住の生命を想ふて憂ひ惱みを消し常に努めて大醫王となつて一切の疾病を癒し斯様にして病者を慰安し其の心を歡喜せしむべきである。

病者はまさに自己の疾病は、妄想、顛倒心、其他諸煩惱から起つたので實在ではない、四大（七十餘種の原素）の合成を假に身体と名けたので、主なく身の我とすべきものもない、其の主なき我なき假の身体に執着する所に病があると知るべきである、斯くして執着を除き、此の身や萬象は種々の要素の合成で唯縁の儘に自然に起り自然に滅するに過ぎぬと知るべきである、然し森羅萬象を作る實在の要素は又無で若し此れが實在すると想ふならばそれは亦顛倒の見界である、此の顛倒は苦の基で先づ之を離れることが必要である、然らば如何にして之を離れる

も共に降すべきである、此の様に教導し一切究竟得る所無しと觀せしめ之によつて病者の心は自在に老病死の苦しみを斷つのである、是れが佛の證悟である、聖者は空しく老病死を斷する勇猛精進を起すべきである。

又病む者は斯の如き思ひをなせ、自己の疾病は既に眞でもなく有でもない又群生の疾病も亦眞でもなく有でもない、而し此の觀察をするには絶對平等の大慈悲に依るので相對利那の愛着の念によつてはならない、愛着の念がなければ永遠に行く處として自在ならざるは無く一切の縛を解く。何をか縛と言ひ解といふ、報を望んで證悟を求むは縛、一切の救済に向ひ自由に進むは解、又諸人に道を與へ生滅を斷じ自ら障りなく絶對常住の眞如を体得するも愛着の念あれば是れ自在の智慧なき、縛智慧ある方法は解である、又智慧と方法に就いて身は、無常、苦、空、非我と觀するは智慧、身が病むとも常に生死の中に

ありて一切に道を與へて厭ふことのないのが方法である、又身を觀じて身は病を離れず病は身を離れず、身病一相、不新、不古、たとひ身病むとも永く一切群生の病と伴なつて滅することはないのである。病む者は斯様に心を調へ而も調へ降す所に満足せず、又降さぬ所にも満足すべきではない、若し前者に満足すれば愚人の境界であり後者に満足すれば利己獨善の解脱で小乘の徒である、されば大乘の聖者は何れにも満足せず又罪業の現れである此の生死界にありながら罪業を作らず絶対真理を体得して而も何物にも離れず、凡夫の行でもなく聖賢の行でもなく罪業にあらす淨行にあらす邪惡を超えて而も之を降し絶対智に専心して他を求めず、萬象悉皆絕對平等と觀じて而も差別の境に居て之を導き生死十二因縁を覺了し一切群生を攝取して愛着なく身心其儘煩惱より離るを願ひ、物、心、靈、の一切の世界に差別を行ひて而も平等の真理を破らず、一切空の理に

順つて而も萬善を植え萬有畢竟、性なしとし而も諸人を救済し生死の因を作らずして而も生死し爲す所なくして一切の善行をなし證悟に適ふ行を爲すとも遍く諸人の心を明にし神通力を具へて而も煩惱の中に止り、慈悲、喜捨、禪定、解脱に専念にして其果報を思はず、身は不淨、受は苦、心は無常、一切は無我と觀じて而も滅に偏せず、惡を斷ち善に進みて極に入るも其の努力を捨てず、願求専心に精進して神通自在の力を得、五力、七覺、八正道に於て而も普遍絕對の佛道を顯ひ、心を調へ深く分別して證悟の道を助くるとも而も消極獨善の證悟に入らず、萬象は不生不滅と觀得するとも而も心身の完成を計り、萬有は畢竟真如の現れと觀じて而も時に應じて種々の身を現し一切國土は寂然として本より空の如しと觀じて而も種々清淨なる佛の境界を現す、斯様に差別も絕對も迷ひも悟りもすべて攝めゆきが聖者の爲すべき行である。

然し眞理を求めると言ふことはすべての眞理に就て求める所のないのと言ふのである、迷悟因果の四の原理即ち現世の惡業の集りや又それによる苦に於て或は證悟に至る道を修めて苦樂を滅すことに於ても求めぬすべての眞理に就て求めることのない心に依つて眞理を求むべきである。」と

此の維摩居士の教説に依つて聖衆は皆悉く心明けて萬有の眞理を見、そのまゝ絕對の境地に入つて不生不滅の眞理を体得したといふことである。遮莫。全世界の宗教中全く迷信的分子を含まざるは大乗佛教である。

吾人の宗教は十方常寂光の土であり一唱成佛の證果であり、方角の如何に依つて疾病を惹起したり時日の如何に依つて障礙があるといふが如きことは斷じてないのである、而し如何に無上幽玄微妙の法華經の信奉者であるとは言へ地上の宿命は如何ともすることが出来ぬから重病にも罹れば亦種々な災害を

も受ける、宗祖、田邊上人にしても佐渡流罪の苦難を始め其他數多くの受難があるけれども此れを精神的に味ひ來る時、たとひ如何なる變化が身邊を襲ひ如何なる苦難が降りかゝらうと此れを一種の意味あるものと感ぜらるゝのである、即ち轉禍爲福の法悦に三昧し寧ろ妙法弘通の好機として歡喜せられた即ち磐石の如き金剛不壞の信仰は外界の何物にも脅かざるゝことではないのである、却つて外界の變動を淨化して自己信念の試練とするのである、聖人は龍の口の濱邊で振り上げた白刃を七重に折しめ親鸞は板敷山の麓で辨圓を地に伏せしめた、世尊成道の砌には惡魔の投げかくる刀劍は悉く蓮華と化したと言ひ傳へらるる、法華經信者に對する身邊の變化も又是れと同一味である、何ぞ事々しく治病迷信に走り卜占禁呪に心を迷はさんやである、吾人の信仰は飽くまで歸一佛教である、即ち理屈上他教の存在を久遠實成釋迦牟尼佛の垂跡として肯定するも實際上は他

佛の存在を問はない、換言すれば久遠實成大覺世尊一佛を確信するのである、故に吾人は歸一佛教ではあるが而も汎神論的歸一佛教である若し法華經の行者にして稻荷を祀り弘法の水を服し金神七殺の思想を談り卜占家の門を叩く者があるならばそれは斷じて法華經の信者ではないのである、亦吾人の宗教は徹頭徹尾祈らぬ宗教、祈禱しない宗教である、何故ならば吾人は唱題の功德に依つて煩惱即菩提、生死即涅槃の効果を證得するのである、吾人は二六時中無數の諸佛に護念せられ無限の菩薩に圍繞せられ晝夜不斷の恒砂塵數の如來を友とし絶えず天神地祇の守護を受けて居るのである、故に惡魔も近づきことあたわず鬼神も障礙することが出来ない、即ち無碍の一道である。

願力不思議の信心は大菩提心なりければ、天地に充てる惡鬼神皆悉くおそるなり。洵に息災延命、七難消滅の不可稱不可說不可思議

へて醫藥を服せず醫療を受けずして臥床するを見て世尊は「病ありて治せざるは一の横死なり」と迷信的療病を横死として嚴かに誡め「當に以て道を明かにして時は隨ふて安濟すべし。四大の寒熱は當に醫藥を須ゆべし」と、四大の寒熱即ち疾病は速かに正しき醫療を受けて治療せよと明かに示し給ふた。然るに世の中には種々の迷信に囚はれて邪佛淫祠を信じて治療の時機を逸し遂に自ら生命を亡ぼし所謂横死する者が多數にある。

吾人の身邊は諸佛菩薩を始め梵王帝釋四天大王、難陀跋難大龍及炎魔法王五道の冥官まで常に守護して居るのである。斯の如く妙法蓮華經は絕對無限の功德を具備し、不可思議無量の力がある、故に金剛信には祈りの心も占ひの心も起らない、又無上の功德なるが故は一點の不足もないのである、南無妙法蓮華經と僅かに七字に過ぎないが此の題目の中には宇宙真理の極致を現し、無上甚深の功德利益の廣大

の誦文は南無妙法蓮華經である。

吾人は大乘佛教の中で特に妙法蓮華經を以て佛教の極致、根本となし、生死を解脱し一切の苦惱を離れしむる長生不死の神方であると信じる、然れば唱題はよく衆生一切の無明を破しよく衆生一切の志願を満てたまふのである、南無妙法蓮華經は即ち是れ最勝真妙の正業であり正念である故に一切の惡魔諸障近づくことあたわず實に天上天下唯我獨尊、吾人は諸の菩薩に圍繞せられ八百八神に擁護せられて居るのである、而し法身の覺体でないから病氣にも罹る、其時には愈々精神を強固にして信賴すべき醫師の診療を受くべきである。「われは法華經の信者である」と題目のみを稱へ醫療を閉却するが如きは正しき信者の執るべき方法でない。釋迦牟尼世尊は經の中に「病瘳には常に醫を呼びて之を治せしむべし」と明かに教示遊ばされた。舍衛國の好施長者、重病に罹り死期の近づくにも係らず治病迷信に事

なることは更に無限である、佛教精華の結晶は洵に此の七字に依つて表現せられて居る、更に別に此の七字を外にしては佛教はないのである。

正しき信仰が醫藥と相俟つて療病に上良好なる結果を生じること吾人の常に實見する處である。殊に「我れ佛と俱に在り」と意識する時、疾病の苦痛は觀喜心に依つて輕減せられてゆく久遠實成の釋迦牟尼佛を一心一向に至心歸命し他佛餘菩薩を顧みないが如く、正しき醫療に信賴し他に心を迷はさなかつたならば即ち靈肉一致、難治の疾病も亦良き経過をとるものである。

病に罹つて病を恐れず沈着なる態度を以て醫師の命令に信順し且精神的に大安慰を得て法悦の三昧に住したならばそれこそ健病不二の妙諦である。法然は「病患を得て是れを喜ぶ」と言つた、洵に疾病は法悦の絶好機會である、吾人の思索をして深遠幽妙ならしむるに最も適して居る、吾人は常に保健衛

生に注意して健康に努め苦し一宿業力に據つて罹病した時は廓然として疾病に直面し醫療を受くると俱に大乘無上の深遠なる法華の妙法を愛樂し以て轉輪爲福の實を擧げ、十方常寂光土、即身成佛。常に身口意の三業を以て妙法弘通流布のために精進すべきである吾人は信するのである。合掌。

編輯局より

各地教信を募る
各地諸師の廣宣流布のためそれぞれ活動のさまを互に知りあひたいと思ひます。またそれを個人の情報ともしたいと存じます。ぜひ毎月廿日頃まで御通信を願ひます。

名古屋市東區田代町榮山七七
統一編輯局

大僧正 本多日生師著 本尊論

目次
一、緒言……二、宗教と本尊……三、諸種の本尊觀……四、本尊と眞理……五、本尊と救濟……六、本尊と教化……七、佛敎の本尊觀……八、佛敎の三寶觀……九、佛身觀の考察……一〇、滅後信仰の概観……一一、佛敎本尊の各方面の考察……一二、法華經に顯はれたる本尊……一三、遺文に顯はれたる本尊……一四、本尊の勤請文……一五、本尊勤請の實例……一六、遺文の會通……一七、異論の解決……一八、結論

定價 布製一部 金七十錢 送料金四錢
(紙製は品切れ)

發行所 立正結社
賣捌所 名古屋東區田代町常樂寺内
統一編輯局
編輯名古屋一〇八一番

國友新宗務總監の

施政方針を讀みて

千葉毎日新聞主筆 小林日種

今や宗教は徒らに、過去を追憶すべきで無く、世と共に進み、時と共にひらけゆくものであらねばならなくなつた。將に啓開せむとする新人生に隨順して、如何に宗教を宣布すべきかを考量するとき、自ら清新な活躍が營まれるで有らう。而して斯かる運動は、同時に幾多の因習を打越え、幾多の偶像を打破つて、ゆかねばならぬ必然を有してゐる。若しこれを避けたならば遂に徹底するの日は有るまい。

近代の敎家の使命は、たゞ敎家と寺院との内部に局限さるべきものでなく、又古めかしい祈禱と、説敎のうちらにのみ屈すべきではなく、よろしく街頭に立つて、各種の活ける社會現象のうへに、その宗教的表現を期待しなくてはならない。

時代はますます眞誠を要求する時代になつて來た。民衆の生活はかくて、覺めんとする極みに鍛錬されて來た。我等は冷かな傍觀的態度を廢して、積極的參加を敢てしなくてはならない。

先づ近代思想の根底に向つて、明晰なる去就を決して置き。而して複雑多岐な經濟組織のうちに正しき思想運動を果遂して、宗教と勞働との實際的解決を試みんとし、思想と生活との交渉に對して、全力的實參を爲さんと努力しなくてはならない。——斯く意圖する若き我曹の爲には寔に新人、國友宗務總監は、良き頭目で有り、こよなき棟梁ではある。

新宗務總監は成つた。事實上の新人を網羅して新宗務總監は出來上がつた。而して新宗務總監の標榜する所は釋尊の大調和主義である。更に謂へば調御の大活動主義である。必ずや事蹟の見るべきものあり、之よりして宗門更に大いに振ふで有らう事を期待し、翹望せずには居られない。由來、良心の鋭い宗教家

の生活は決して氣楽なものではない。宗教家と云ふものは、自分では支へきれない程、多勢な家族を持つて居る父親のやうなものである。

更にその宗教家の集團の家長であり、主婦で有るべき位置の宗務總監の心勞の程や、察すべきである。宗門は或る意味に於て、今や確かに過渡期に在ると思ふ。今より二十年程前四箇格言問題を提げて、本多親下が、天下の絹素を提擲された時代を以て、宗門の維新とするならば——組織制度の上に行ける。今次の變革は青年宗教家の精神上に行はるべき維新で有らねばならぬ。而してその必要は既に論議の域を超えて、實行の時期にさしかつてゐる。此の時に當り、我曹は大法將 本多親下を失はずして、その上に、井村新管長、國友新總監を得たるは熾爽たる陣容、中外に誇稱して、甚だ得意なるを覺ゆるものである。且つ新宗務廳の顔振れを見るに、宗門の生める人材を以て組織せられ、新人の純真なる力が、如何に宗門の内政に寄與し、貢獻し得るかを、吾人をして興味を以て、待たしむる點、甚だ欣

快を覺ゆる。——その生活の實質に於ては無産階級に近い、貧弱なもので有り乍ら、その様式に於ては、特權階級に髣髴たる風采を備へねばならぬ宗教家。その生活のみならず、その思想に於ても、新しいものと古いものとが、無批判に混雜し合ひ、かくて何時も何れの立場にも純化されきらないで、曖昧模稜たる言動を取るに慣れたる宗教家。——斯かる混雜せる思想の抱懷者は、やがて凡てから見棄てられる日が來るのであらう事をこれ恐れ、悟えずにはゐられない。顯はくば我が親愛なる井村新管長親下、並びに、國友新總監親下は、此際宗門の爲、偉いなる鐵腕を揮つて、宗教家に最良の指針を與へられ、より良き天分を充実に盡くし得るやうに新しき活動の天地を啓拓して、たゞきたいものである。猶ほ希ふは、我曹宗教家をして、良き治下に更に永く在らしむる爲にも、こよなき健康の状態を保持なさるゝやうに至心 個禱熱祈するものである。

(大正、一五、五、一二、千葉市千葉毎日新聞社編輯室にて)



兒童劇 ベル

古田 昂 生

主役

甲 乙 丙

其他 數名 A・B・C・D・E

特にこの劇は臨にあつて目覺し時計のハの音をさせる人を必要とする(これは誰れか大人の方にやつてもらふこと)

幕開く 甲と乙舞臺に在る

甲「時に君、何か面白くないことはないか?」

乙「無いナア、君は?」

甲「僕も無い」

乙「あッ、面白くないこと思ひ出したがネ、この間、太郎君がね、廣小路で今すてきに面白くないことである、早く行つて見ておいて」と云つたもんだから、こゝから十丁もある

廣小路へ走つて見に行つたんだ

甲「サム、サム、そして何があつたかい」

乙「それがさ、何があつたかも知れぬ、ちつとも面白くないことなんぞありやしない」

甲「オヤ、それは?」

乙「電車は相變らずゴーゴと走つてゐるだけだし」

甲「自動車はプー、相變らず走つてゐるだけだし……か」

乙「さうだよ、つまり太郎君にだまされたのだよ」

甲「まあ、情いやつたなア」

乙「ほんとは、裏が立つちまふよ」

甲「僕もこの間、人にだまされたことがある

乙「君もか……」

甲「ほ——」

乙「なぜ人間はこんなに嘘をつくだらう?」

甲「どうしてだらう?」

乙「わからない」

三人考へぬ

左手よりA登場

A「ヤ、」

乙「ヤア」

甲「どこへ行つて來たのだい」

A「僕か」

乙「カム」

A「僕は今、お友だちの處へ行つて力くらべをやつて來たんだ」

甲「そりや面白かつたらうね」

乙「どんなことをして」

A「あ、僕がいちばん力強いのだ、みんなが、よう上げない重いものをサントコと上げたんだ」

甲「何を上げたの」

A「サム、馬を一匹」

乙「馬を一匹!?」と驚く

A「ア、偉いだらう」

と、A威張つて右手へ退場

甲「その後ろ姿を見乍ら」「嘘つき奴!!!」

乙「嘘だなア」

B「登場」

B「サー」

乙「サー」

乙「どこへ行つて来たい」

B「サム、餘り笑いで、一つ僕はどの位寒いのにお我慢が出来るか、逆の中へ、裸で入つて来たのさ」

甲「逆の中へ」

乙「はだかだ……」(二人驚く)

B「もしたら一時間半ばかり辛抱が出来たよ」

甲「ハエー」

B「さア、これから、又家へ帰つて、雪の中

乙「さア、これから、又家へ帰つて、雪の中

で寒くもんでどの位居れるのか試験をしてやらう、ではさよなら」退場

乙「その後ろ姿を見て」「嘘つき奴!」

甲「嘘だよあれは!」

C「登場」

C「サー」

乙「サー」

甲「どこへ行くの」

C「サム、僕か?すてきに面白いものを見に行くのだ、この世界が始つてから、まだ一度もない面白いものを見に行くのサ」

乙「そんなこと」

C「さあ、それは云へないよ。まア、世界で始めての面白いことだと思ひ給え、それでいゝのだから」

甲「僕たちも見えないの?」

C「見えない、それは僕に限つたことだ、どれどれ見て来やう、ちや失敗!」(C退場)

乙「や、失敗」

甲「あれも嘘だ」

乙「サム嘘だ」

D「登場」

乙「よう、何をしてゐるんだい」

D「僕は本を讀み過ぎたので頭を休めに散歩をしてゐるんだよ」

乙「本を讀み過ぎて?」

甲「どの位讀んだの」

D「サム、お伽噺の本を十五冊と、理科に関する本を五冊、と歴史の本を十冊ばかり……」

乙「で、それをいつから讀みかけて?」

D「あ、おひるからだよ」

甲「フーム」

D「あ、頭がつかれた。本を讀むのもいゝが頭がつかれていけない!さよなら」退場

甲「これも嘘だ」

乙「サム」

甲「来るもの、来るもの音壁をつく」

乙「ほんとに嘘つきばかりだれえ」

甲「なぜ、こんなに嘘をつくのだらう」

乙「どうしてこんなに嘘をつくのだらう」

甲「嘘がすぐ判る機械はないものかナア」

乙「サム、ほんとどうだなア」

甲「だれか發明しないかナア」

乙「サム、すぐ嘘がわかる機械がほしいものだ」

甲「乙考へ返む」

丙「登場」

丙「ヤア、今日は」

乙「今日は」

丙「何を考へてゐるの」

甲「嘘がすぐ判る機械がないものか」と

乙「さつきから二人で考へてゐる處だよ」

丙「なーんだ、そんなことを考へてゐるのさ」

甲「乙「エ、エ、」(といふかしかる)」

丙「そんな機械なら、僕がすいぶん前に發明したよ」

甲「君、そりやほんとうか」

丙「ほんとどうだとも、これだ、その機械は」

乙「は、この箱が?」

丙「サム、この箱の前で嘘を云ふものがあるよ、すぐ、この箱の中でベルの音がするんだから、すぐ判るんだよ」

甲「ヤア、面白いナア」

乙「一ツ試めして見たいナア」

丙「ほら、あそこから力自慢の一撃が来たためして見給へ」

乙「よし」

A「登場」

甲「あ、君、君はさつき馬を一匹君の両手でさし上げたと言つたれ」

A「サム」

乙「ありや、ほんとうかい」

A「ほんとどうだとも」

丙「僕にベルの音鳴る」

甲「嘘つき、この嘘を見破る機械のあることを知らぬかと」(箱を見せる)

A「ヤア、これは」退場

乙「丙に」や、これはすてきな機械だ」

甲「ほんとどうに面白い機械だ」

B「登場」

B「ヤア、まだ居たのかい」

甲「サム、君は今まで雪の中へ寝こらんでゐたのかい」

B「サム、寝こらんでゐたよ、何んともなかつたので、もう止めた」

乙「そりやほんとう?」

B「サム、ほんとどうだよ」

ベルの音する

甲「嘘つき奴!このベルの音が承知しないのだ」

乙「この嘘を見破る機械を知らぬのか」

B「ワッア」と退場

丙「どうだ」

甲「感心した」

乙「ほんとどうに感心した」

甲「君は偉いれ」

丙「サム、こんなことは、何んでもないよ」

CとD登場

四五

働く教化會館

各方面から利用

名古屋市中區新榮町三ノ一常徳寺跡に建設せられた教化會館は館主國友日斌僧正が永年の大活動と新時代に向つて投げる熾烈な抱負とを如實に物語つてゐるが、同會館開館式は前號に於て報導した如くで、その後全會館は名古屋自慶會、統一開名古屋支部が毎月本多大僧正親下を招じ日蓮主義講演會を開催すると、妙教婦人會の例會が毎月催されるの外、法國少年少女會が月二回宛開催さるなど常樂寺の運動の道場となつてゐる外は、各方面の講演會や、各工場の職工慰安會、その他、音楽會婦人會、修養會など、申込殺倒し、會館は寸毫の暇なく使用されてゐる有様である。

C 「あ、面白かつた」
D 「あ、また本が讀みたくなつた」
甲 「ほんとに面白かつたかい」
乙 「又、本を二十冊讀むのかい」
DC 「ウム、ウム」

ベルの音なる
甲 「この鐘つき奴！」
乙 「嘘を見やぶるこの機械がわからぬか」
DC 「プアー」と退場

甲 「あ、面白かつた」
乙 「ほんとに面白かつた」
丙 「ウム、面白い機械だよ」
甲 「君は偉いね、そして君は、こんな機械を發明する位だから、ほんとに今まで嘘を云はれて、困つたからだらうね」

丙 「ウム、その通りだ」
乙 「君のやうな人こそ、今までに嘘をついたことの無い人だらうね」
甲 「そりや、さうだらう」
丙 「さうさ、僕は今まで、産まれてから一度

だつてうそを云つたこと(ベルの音なる)ナ、これは(とあはて、退場)甲として、吃驚してそのうしろ姿を見てゐたが顔を見合はせて

甲 「アハツハツハツハツハツハツ」
乙 「嘘を見破る機械を自分で發明して」
甲 「自分で見破られた」
乙 「アツハツハツ」
甲 「こんな面白いことは僕は生れて始めてだ」
乙 「あ、世界中にだつて無いだらう」

(ベルの音する)
甲乙、びつくりして、箱の兩端へ飛びのき、口へ手をあてて遠くから箱を見る
甲 「君！」(小さい聲)
乙 「君！」(全)
甲 「減多なことは(小さい聲)」
乙 「いへないぜー」(小さい聲)
甲 「これが見てゐる」(小さい聲箱を指さし)
乙 「これが開いてゐる」(全)

各地教信

本多大僧正巡教

四月中の本多大僧正御巡教左の如し、△十四日午後三時半より岡山縣至、三井造船所にて「理想の文化と佛教」△十五日午後零時半より播磨造船工場にて「理想の文化と佛教」△午後七時より岡山縣和氣町、和氣俱樂部にて「修養と思想」△十六日午後零時半神戸三愛内燃機製作所にて「道德の主義」△午後七時共益俱樂部にて「我國の文化と佛教」△十八日午後七時より神戸市外、岩屋青年會館にて「思想の推移と國民の信念」(視下「時勢救済の根本義」細野辰雄少將 以上)

▲**徳川監督布教師巡教** 四月十六日新舞鶴信行寺にて「信は道の元」京藤布教師「超勝の教義」徳川権大僧正十七日徳都了訓寺にて「感恩の生活」京藤師「時勢救済の根本義」細野少將「徳教の尊重」徳川師△十八日鳥取市法泉寺にて「現在の世相と日蓮主義」京藤師「日蓮主義と日本民族」徳川師△十九日青谷小學校にて「國家の現状」富田師「信仰の徳と力」京藤師「宗教と人道」徳川師△二十日松崎本立寺にて「時勢救済の道」京藤師「護國の信念」徳川師△二十一日日本山講堂にて「國

亂にて聖日蓮を憶ふ」京藤隨行員「日蓮主義と信誼開會」徳川監督布教師△二十二日川東本正寺にて「信仰の徳と力」京藤師「日本文化と法華經」徳川師△二十三日耳原法華寺にて「日蓮聖人の情懷」金光布教師「安心の要義」徳川権大僧正△全日夜大阪蓮成寺にて「處世の第一歩」金光師「感應と法命」徳川師△二十四日堂開寺にて「人に教無ければ」金光布教師「日蓮主義の道德觀」徳川師△二十五日堺妙法寺にて「日蓮聖人の人生觀」有田布教師「異國の基礎」徳川師△二十六日京都布教師にて「道德の根柢」有田師「信仰と人格」徳川師△全夜木津妙法寺にて「實在の信仰」有田師「恵みを受けて」徳川権大僧正至る處頗る盛會にて多大の感激を興へた。

▲**名古屋自慶會** 名古屋自慶會の五月はいつもの如く本多大僧正を講師とし左の日時で左の工場布教、或は公開講演會を爲した。
△十九日午後一時より豊田鐵機工場△全日午後三時より山岸製材工場△同夜は教化會館に於て行學會五月例會を開いた、△廿日午前十一時より豊田切切工場△全午後一時より日本車輛工場△同夜は教化會館で公開講演會を開いた、△廿一日は午前十時より服部

商店で△全午後一時より三愛内燃機工場△全四時より東京モスチン工場で各職工に法輪を説いた、△廿二日午前九時半より豊田本社で△全日午後一時より豊田鐵下工場△全三時より日本磚子で△全五時半東洋紡績尾頭工場で各職工のために法燈の光りに歡嬉と平和あることを提示した。

▲**妙教婦人會** 妙教婦人會五月例會は八日午後七時より教化會館樓上婦人會室で開演した田久保本誓師「釋尊の宗旨」と題する講演の後、醫學博士石田飯氏が「若狭病と婦人」といふ題で賑々一時同席、醫學の立場より或は宗的地見地からより興味と感銘ある講演を爲し全九時盛會裡に散會した。

▲**大阪教報** 四月一日和赤田宅にて「三大秘法」井口氏「感激の精神」京藤師△五日蓮成寺にて「煩惱即菩提」石井氏「生死の大事」京藤師七日平山宅にて「法華經大要」京藤師△十日堂開寺にて「經卷相」上田師「信仰の要旨」京藤師△十二日立正經社本山團體參詣△十七日大紙俱樂部にて「我國と佛教」本多大僧正△十八日蓮成寺にて「婦人會釋尊傳」△二十日清原宅「佛教の正統」和井田氏「道に就て」上田師△二十一日光好宅にて「彌陀の教」和井田氏△二十六日徳永宅にて「人生と奮闘生活」京藤師△二十八日朝蓮成寺にて「開宗紀念法要を修し夜堂開宗」徳川師△廿九日朝蓮成寺にて「開宗紀念法要を修し夜堂開宗」徳川師△三十日朝蓮成寺にて「開宗紀念法要を修し夜堂開宗」徳川師

効果を奏せり。

▲金澤通信 △婦人會 四月廿二日午後

二時本長寺にて開會能仁一十師「嗚呼蓮華の道」と題して教説△天晴會例會 △廿六日午後七時例會を開く杉田常政師能仁一十師成島隆康師出演△説教會 廿七日午後二時本行寺にて催す能仁成島兩師出演△家庭講演 廿九日夜河合氏宅にて開會能仁一十師出講△庫裡成滿式 武家が檀家であつた金澤本長寺に廢藩置縣の時代の推移を受けて永く開堂されて居た寺だつたが住持の發願に依り庫裡の再建を計られ着々工事を進行しつゝあつたが在田師兼牛にして進化され、後任住職能仁一十師其志を受け繼がれ専心努力し漸く此程落成したので去る四月廿五日十教區僧員隨喜集會盛大なる成滿式を舉行した此の浮業を讚美せんとして各地から發せられた祝電は百通に及んだ、みんな金澤教壇の發展を祈る激勵の祝電である今宗務總監岡友田師よりの祝電を紹介する「セイテンチシユクダスコンカナデア フツコウノダイニゴ ナリド ヨクセヨ」住職も總代も非常に感激に満ちたことだ新しく金澤教壇も發展の曙光を見つゝある。

▲成就寺の開堂式と講演會 大正十

二年九月一日の關東大震災に富山の本堂及廻廊は倒壊し原裡大破の大災害に遭つた爲小竹住職は惣代人を始め外一般檀家と種々熱誠を重ね大正十三年三月再建寄附勸募に着手小川

齊藤兩人を工事委員に選び翌十四年三月二十八日上様式を擧げ其後工事着々進行銅板葺き屋根工事も完了したので四月二十五日を卜し管長本多日生鏡下を懇請第三布教區一般僧侶を始め特志大徳諸師御臨場の下に開堂式大法會は開修奏樂裡に鏡下の別記慶贊文御親讀に次で小竹住職の式辭川端惣代人の工事奉告文鈴木惣代人の祝辭平野藤森林次郎兩君の檀家代表の祝辭全國各地寺院住職よりの祝電祝辭は要原法要主任に依りて教讀せられて三時半終了し、式後鏡下は「信心の修養」に約一時間諷誦々懇説より細に渡り轉法口輪の妙講の盡され講堂の聽衆爲に信心の妙法に酔つた様で立正大師傳「佐吏の雪風」は瀬江第一師に依りて談講せられ、六時より栗原星野笠原等七八名の傳道隊は除障に燈籠に最も盛んに全町を宣傳し歸山するや堂に溢れる盛會に川崎特命布教師は「生の莊嚴」題下に約一時開余の長廣舌を振ひに續いて秋葉栗原星野笠原の諸師文々正法の妙説を述べ盛會裡に午後十一時閉會。

慶 讀 文

奉勸請本門常住の三寶護法華國の諸天喜神來臨影響悉知無覺本日修する所の當成就寺開堂供養は先づ以て正法興隆皇道繁榮天下泰下萬民快樂を祈り併て當寺檀家先祖代々の香從に回向するものも也夫れ立正安國の妙説は我が日蓮大聖人の唱導する所にして爾は法に依て昌へ法は人に依て衰しと言へり、而て妙法華經は一代聖教の經王にして其教旨の無上勝妙なるは茲に讀説を

要せし經に三説超過の金口を留め釋に超八醍醐の明文を存す誰れか亦之を疑はんや我が大日本帝國は神明天に代つて之を顯き皇統相承けて總々絶へず天壤無窮の神勸導として今尙ほ輝けり此の法此の國一大事因縁の故に上行大菩薩は即此の千葉縣安房國に降誕し身經法重の化尊を興して法屬冥合の端を開く、爾來七百年隆養なきにあらざるも今や時運回轉し日蓮主義勸導は眞に旭日昇天の故あらんとす此の時此の際本堂再建の計畫成り莊嚴美觀奮に倍々眞に盛なりと謂ふべし將來大に法鼓を鳴らして四方に教令を傳へん其功其徳無邊にして十方の虚空にも滿ちぬべし、寺檀の奮勵稱揚するに足る。經云内ニ智恵ノ弟子アツテ佛法ノ深義ヲ解サト外ニ清淨ノ檀越アツテ法ヲシテ久シク住セザメント。道調赫々として我等の前途を照せり茲に清淨の四衆と共に更に興立佛法の發願を堅固にせん仰き願くば此の修福に關ひては所願成就一切無碍ならんことを

維時大正十五年四月二十五日 顯本法華宗 管長大僧正 本多日生

▲濕津教報 千葉縣△四月八日濕津小學

校に於て生徒六百名のために釋尊降誕紀念講演「お釋迦様の力」星野純義師△四月十三日下野本奉寺にて立正結社大會「立正門下ノ自覺」星野分會長「上行菩薩と日蓮聖人」笠原信真師、餘興其他ありて懇親會を催せり當日一般參禮者百五十名を算し盛會なりき△三月廿八日夜農民慰安會「下野本奉寺にて」農村民の自覺」星野師「統一節演奏三席」宇宮宮傳孝

社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の計設、監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず、御便宜の個所へ御相談被下度候
規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入道は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は于刻狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所
(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所
(電話西三三二二番)

臺灣檜材ノ大特徴
一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理整然木
六、木高雅色

目 次

聖訓摘要……………	本多日生
教觀不離……………	本多日生
現代宗教家に望む……………	海軍中將 佐藤鐵太郎
聖徳太子と法華經……………	森川日修
各地通信報導……………	編輯局

第三十三年七月號

統 一

統一 定價		統一 廣告料	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢	中一頁	金拾五錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	分一頁	金九錢
	送料共	頁一頁	金五錢
	送料共	頁一頁	金四錢
	送料共	頁一頁	金四錢
	送料共	頁一頁	金四錢

大正十五年 五月三十日印刷
大正十五年 六月一日發行
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
行(第三百七十五號)

不 許 複 製

編輯所 統一編輯局
發行所 統一發行所
印刷所 三益社
編輯人 國友日斌
印刷人 鈴木日雄
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
名古屋市中區千種町字五反田五二番地
名古屋市中區東區田代町字城山七十七番地
振替東京五一〇七一番
電話長東五四八七番
名古屋古屋一〇八一九番